親愛なるきみに捧げる一通の手紙（後半）

マッキー☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親愛なるきみに捧げる一通の手紙（後半）

【Ｎコード】
Ｎ０２３０Ｓ

【作者名】
マッキー☆

【あらすじ】
親愛なるきみに捧げる一通の手紙

親愛なるきみに捧げる一通の手紙

九　夜遅くまで残業するようになった理由

おれは社会人になるまで、たいして英会話に興味を持ってはいなかった。

そんなおれが、社会人になってから、英会話に興味を持ったのは、友達から、無料の英会話をやっているところがあると聞いたからだ。

それでも、おれは行く気はなかった。それよりも、会社で風早にいじめられていることの方が気がかりだったからだ。

おれが就職してから数カ月すると、最寄り駅で、スーツを着た人が、英会話を無料で教えているので来てほしいというビラを配っていた。他の駅では配っていないのに、なぜおれの最寄り駅だけ配っているかは、その時は疑問に思ったりしなかった。スーツを着た男は、おれが通ると、毎回話しかけてきた。おれは適当に聞き流していた。

だけど、季節が冬に変わった頃になって、英語を話せない風早を英会話なら見返せると思い、話しかけてみることにした。

その日は、本当に寒い日で、手袋もせずにスーツを着た男は手をこすっていた。おれは温かい缶コーヒーを二つ買って、一つを彼に渡そうと思って、話しかけた。

英会話を習ってみたいと、たどたどしい英語でおれが言うと、彼は笑顔でビラを渡してきた。会話をしているうちに、寒そうなので、缶コーヒーを渡そうとした。彼は表情が変わり、はっきりとした口調でいらないと言った。

彼の表情に笑顔はなかった。おれは彼が手を寒さでこすっているのに、なぜコーヒーをもらわないか、わからなかった。コーヒーが嫌いなのかもしれないし、何らかの理由で、ものを受け取ってはな

らなかったのかもしれない。
数日後、おれは英会話を無料で教えてくれるという、指定された場所に行ってみた。アパートの大部屋だった。
最寄り駅でビラを配っていた彼が、また会ったね、と話しかけてきた。それから、おれに特別に、みんなとの集団授業を終えた後に、三十分無料で英会話を教えてくれると言った。
当時のおれはなんて親切な人なのだろうと、感動した。だけど、一緒に集団授業を受けていた日本人の態度が悪かったので、そこに顔出すことはやめて、英会話学校で習うことにしたんだ。
きみは、英語を話すことができるだろうか。おれは正直、あまり話すことができない。言葉は意思伝達において、重要だ。しかし、島国の日本にいると、一カ国語話せれば問題にならないので、なかなか身に着かないのも確かだ。
おれは風早を見返そうと、英会話学校に毎日行って勉強していた。おれの最終目標は、英語が話せるようになって、海外の支社で働くことだった。
２００８年になって、半年以上働いたこともあり、仕事にも慣れて来た。そんなある日、おれがいつものように、仕事後に英会話学校に行こうとすると、富田が呼び止めた。
「鈴木、今日は飲みにいくか」
早く家に帰りたかったが、風早と対立している以上、富田とは友好な関係を築いておかなければならなかった。
「いいですね。飲みに行きましょう」
「風早も飲みにいくか」
富田は風早にも声をかけた。
「行かない」
風早は一瞬おれを見てから、視線をパソコンに戻した。
「そうか。じゃあまた今度な。鈴木、行こうか」
「行きましょう」
安い居酒屋に着いて、生ビールを注文すると、すかさず富田は本

題に入った。
「風早がお前のことを気に入らないのはなんでだと思う？」
「わかりません」
「考えてみろ」
おれは考えた。もうこれ以上人と対立することは嫌だった。真剣に考えたが、どうしてもおれには理由がわからなかった。
「やっぱり、わかりません」
富田はやっぱりな、と言いたげに鼻を鳴らした。
「風早はな、お前が先に帰ることが気に入らないんだよ」
おれはその言葉を聞いて、そんなことが原因だったのかと、後頭部を椅子で強打されたぐらいの衝撃を受けた。
「じゃあ、どうすればいいんですか」
「おまえは毎日風早が仕事終わるまで待っていろ」
おれはすぐに返事をすることができなかった。意味もなく、おしぼりを握った。
「いや、か？」
富田はすわった目でおれを見た。
「わかりました。でも、本当にそうなんですか。なんだか信じられないですよ」
「別に信じたくないなら、信じなくていい。ただ、鈴木は一生風早と仲が悪いままだがな。おれとしてもグループ内の仲が悪いと困るんだ」
そう言われると、反論できなかった。
「わかりました。富田さんの言う通り、実行してみます」
その日も、おれはかなり飲まされたが、吐くことはなかった。次の日から、おれは毎日、風早が仕事を終えるのを待った。
風早は、定時を過ぎても帰る気配がまったくなかった。風早が夜遅くまで仕事をしていることを初めて知った。
おれは仕事もないのに、パソコンで英語の勉強をしながら、風早が仕事を終えるのを毎日待った。それはとてもつらい時間だった。

英会話学校で自習したいのに、自習することができなかった。毎日、終電ぎりぎりで帰った。

夕食を深夜の一時頃に食べ、六時に起きるという日もあった。だけど、忙しいサラリーマンなら、それぐらいは普通なのかもしれない。

問題は、おれは忙しいわけでもなんでもないのに、毎日夜遅くまでＸ社にいたことだ。それでも、英会話学校で授業がある日を除いて、おれは決して風早より早く帰ることはなかった。

おれは通信教育でも英語を習い、二・三カ月でＴＯＥＩＣの点数が三百点近く上がった。

ＴＯＥＩＣはＸ社で受けたので、風早もこれでおれのことを見返すだろうと思った。社内の掲示板に成績優秀者として、おれの名前が貼り出されても、風早の態度は変わらなかった。おれのＴＯＥＩＣの成績にはまったく触れなかったし、いつも通りに、おれを怒鳴り続けた。

風早はなぜ、執拗なまでにおれを怒ったのか、富田はなぜおれに風早が仕事を終えるまで待つように言ったのか、当時のおれには理由がわからなかった。今だって、わからない。だが、まったく予想がつかないわけじゃない。だけど、やっぱり現状では、予想の範囲内だ。とりあえず、話を続けて先に進もう。

十　サトラレだと知った理由

おれは営業でお客さんのところに寄っても、必ずＸ社に帰って、風早が帰るのを待つことにしていた。疲れ切っていて、本当は直接家に帰りたい時がたくさんあった。でも、おれは必ずＸ社に戻った。いつものように、営業の部屋の中に入ると、風早にあいさつをした。

「ただ今もどりました」

もう定時後で、残っている人はまばらだったが、風早は当然のように仕事をしており、おれのあいさつに対して返事をしなかった。

突然、風早が机を叩いて立ち上がった。
「ねえ、今日Y社行ってきたんでしょ？」
「行ってきましたけど、それがどうかしたんですか？」
「どうかしたんですかじゃないわよ。あたしがY社の現場から納期の催促受けたんだから」
Y社から納期の催促なんて毎日受けていた。それをいちいち騒ぎ立てられるほど、おれは人間ができていなかった。そのとき、電話が鳴ったのでおれは電話に出た。
「はい、X社の営業部ですが」
「風早さんいらっしゃいますか」
「少々お待ちください」
「風早さん、お電話です」
風早は舌打ちをしてから電話に出た。お客さんと接する時の電話に出る声は明るかった。十分後、風早は電話が終わると、咳払いをした。
「なんであたしが話している最中に電話に出るの？」
「なんでと言われましても。電話が鳴ったから誰かがとらなくちゃいけないじゃないですか」
おれが反論すると、風早は目を大きく開いておれを睨んだ。
「言い訳なんて聞きたくない。これからはあたしが話しかけているときは電話に出ないこと。わかった？」
おれが返事をしないでいると、風早が追い打ちをかけた。
「ねえ、聞いているの？」
「わかりました」
風早はおれを怒ると、席を外してたばこを吸いに行った。おれは容赦のない風早の攻撃に、精神的に追いつめられていた。パソコンを見つめても、思考が停止して何もすることができなかった。風早がたばこを吸い終えて戻ってくる姿を見てから、ようやく我に返り、仕事に戻ることができた。その日も、夜遅くまで風早が帰るのを待った。

毎日が、風早との我慢比べだった。風早が先に帰る時、風早にお疲れ様でしたと声をかけることが、唯一おれが風早よりも精神的に優位に立てる瞬間だった。

風早は返事をしないで無言で帰って行くが、それでも構わなかった。おれはどんなに文句を言われても、風早が先に帰るのを毎日待った。

そういった日々を繰り返す中で、おれはいつからか、あることに気がついた。どこに行っても、人々が咳やくしゃみをしていたのだ。毎日、毎日、繰り返し咳やくしゃみをする人々に、おれは恐怖した。

ある日、バスに乗り込むと、おばあさんが咳き込んでいた。あまりにしつこく咳き込んでいたので、それが気になり、文句を言ってやろうかと思ったが、やめた。おれは心の中で思うことはあっても、やめてくれと言ったことは一度もない。それが、おれの信念だからだ。

テレビのニュースでは、新型インフルエンザの情報が流れていたし、テレビ番組を見ていても、咳やくしゃみをする人がいた。会社に行けば、咳やくしゃみの音で溢れていた。風早や富田も、ことあるごとに咳やくしゃみをしていた。

おれの頭の中は大混乱だった。友人に相談することもできなかった。人々が咳やくしゃみをするからという話を友人にしても、頭がおかしいやつと思われるだけだと感じたからだ。だから、誰にも言えずに、一人で抱え込んだ。

ある朝、目が覚めると体がだるくて、X社に行きたくなかった。それでもおれはネクタイを締めてX社へと向かった。電車の中では、相変わらず咳やくしゃみをする人で溢れていた。

だけど、おれはやめてくれとは言わなかった。本当は叫びたかった。平手打ちでも食らわしたかった。だけど、おれは暴力には訴えなかった。それがどんなに些細なことだとしても、反撃された方は傷つくかもしれないからだ。

おれは他人を傷つけるくらいなら、自分が傷ついた方がましだと

考えていた。それは誰かのためではなくて、自分のためだ。他人を傷つければ、きっとその反動で自分の心も深く傷つけてしまうと考えたからだ。どんなに攻撃されても、他人を傷つけない自分の方が、好きだったからだ。

たとえ、戦争に強制参加させられたとしても、実際はできるかわからないけど、他人を殺すぐらいなら自らの死を選択しようと常々考えていたからだ。攻撃的ではない、暴力に訴えない、誠実な自分を、誰よりも誇りに思っているからだ。

だから、おれは文句を一言も言わなかった。しかし、そんなおれでも、心の中は平静ではなかった。なぜだかわからないけど、一向にやめようとせず、何度も繰り返し咳やくしゃみをする人々に異様なものに思えた。電車通勤の一時間はとてつもなく長くつらい時間に感じられた。

電車の席に座って、音楽を聞いていた時、目の前に立つサラリーマンの咳の音がひどかった。音楽の音量を上げても、咳の音が耳から離れることはなかった。おれは耐えきれなくなり、通勤途中の駅で電車を降りてしまった。それからトイレに籠って、落ち着くのを待った。何度も自分自身に、大丈夫、大丈夫と話しかけた。そうこうしているうちに、X社の始業時間に間に合わない時刻になってしまった。

おれは迷いながらも、今日は休むことにして、駅から少し離れた閑静な住宅街の空き地に行って電話をかけた。富田はたばこを吸っているのか、なかなか電話に出なかった。富田は休憩時間を邪魔されないために、携帯を置いておく癖があった。

数回電話をかけると、富田は電話に出た。

「どうした？　鈴木」

「すいません、富田さん。今日風邪引いてしまったので休んでもよろしいでしょうか」

「しょうがないやつだな。まあいい。今日はゆっくり休め」

「ご迷惑おかけします」

おれは電話を切ると、溜め息をついた。初めてしたずる休みの申請だった。いや、正確には、ずる休みではないのかもしれない。おれの体は健康だったが、おれの心は限界だったからだ。会社を休んだことに対する罪悪感と今日一日仕事をしないで済む解放感が入り混じっていた。

駅に向かう道には、マスクをつけた人が何人もいた。急ぎ足で歩きながら、いろんなことを考えたんだ。その時に、あることを思いついた。それは、常識では考えられないことだった。自分のことをサトラレではないかと考えたのだ。だけど、おれはその考えを簡単に信じたりはしなかった。確証が必要だと思った。

どうすれば、確証を持てるか歩きながら考えだした。人に聞くことはできない。人に聞かずに知る方法はないか。おれは試しにいつもとは違うルートで家に帰ることにした。もし、これでも人々が咳やくしゃみをしているのなら、それはおれがサトラレだから、どこに行ってもおれを発見することができるのではないか、そういう仮説を考えたからだ。

駅に着いて、路線図を見ながら、わざと遠回りして帰る経路を探した。おれにはゆっくり見ている時間はなかった。駅を通り過ぎる人々は咳やくしゃみをしていたからだ。

おれは経路を覚えて電車に乗った。いつもと違う電車に乗っても、咳やくしゃみをする人がいた。おれの頭の中では激しく葛藤していた。おれはサトラレなのか、いや違う、そういう思いが、ルーレットの球みたいに何度も回転しながら頭の中を駆け巡っていた。たまたまかもしれない、そう思うことにして、電車内にある路線図を見て、さらに経路を変えてみた。

電車を降りて、次の電車に乗り込んだ。今度は誰も咳やくしゃみをしないで欲しいと思ったが、結果は違った。電車内に乗る子供が咳をしていたのだ。

おれは動揺した。本当にサトラレなのか。しかし、その考えに何一つ、反論できる材料はなかった。もし違う可能性があるとすれば、

それはおれが狂ってしまったことだけだった。いわゆる幻聴というたぐいなら、ありうると思った。でも、おれは自分が狂ったようには思えなかった。頭の中で、単純な計算をしてみても、問題はなかったので、やっぱりおれは正常だと考えた。

結局、おれがサトラレだから、どこに行っても人々はくしゃみや咳をすることができるのだという結論になった。それは、絶対に妄想ではないとは言い切れないし、頭が狂ったのかもしれなかった。でも、今は、それが唯一の真実だと考えている。

これが、おれが自分ことをサトラレだと知った理由だ。きみはこの話を聞いてどう思った？　たくましい、妄想だと感じるのだろうか。もしきみがそう感じたとしても、おれは否定をしない。世の中には、絶対に正しいと言えることなど、ほとんどないからだ。だから、きみがおれの考えを妄想だと感じても、少しもおかしいところはない。

次の話は、電車を降りて自宅に帰るところから始まる。どうしておれが亡命しようとしたか、話すことになる。きみからしたら、おれの一人よがりの妄想かもしれないが、おれがその時実際に感じたり、考えたりしたことはおれにとって事実だ。そこで経験したことを、きみにも伝えたい。それでは、次の話に移ろう。

十一　亡命しようとした理由

おれは電車から降りると、走って家まで帰って行った。落ち着くことができなかった。家に着いて、飲み物を飲もうとすると、コップを持つ手が震えてしまい、なかなか飲めなかった。

落ち着こうとして、テレビをつけた。平日の日中だったので、テレビショッピングかニュース番組ばかりだった。これでは気をそらすことができなかった。だから、友人から勧められていたヒーローズのＤＶＤを一気に見ることにした。面白いドラマでも見れば、心境も変わるかもしれない。そう考えたんだ。

ヒーローズを見ていくうちに、おれはあまりの面白さに夢中になった。現実の問題から逃避するには、これしかないと思って、連続で見ていった。どんどん進んでいくうちに、おれの中で恐怖心が少しずつ芽生えていった。

体を怪我してもすぐに治せる超能力者の娘が、見つかると人体実験されてしまうと、その父が言っていた。この言いまわしは正確ではないかもしれないけれど、超能力者はばれたら危険なのだと思った。

では、おれはどうなるのか。おれは超能力者で、サトラレだから、能力はばれている。おれは下手したら、人体実験されてしまうかもしれない。そう考えると、体が震えてきた。なぜ、おれの最寄り駅だけ、英会話を無料でやっていることをビラで配っていたのか。なぜ、隣駅やもっと大きな駅では、そういうことをやっていなかったのか。

どうして、ビラを配っていた彼はおれが缶コーヒーを渡した時、受け取ってくれなかったのか。それは、罪悪感が芽生えたからではないのか。

なぜ、高校の時、おれのクラスだけ留学生がいたのか。それは、おれを観察するためではなかったのか。

おれはテレビの電源を消した。いろんな考えが一気に駆け巡り、それ以上ヒーローズのＤＶＤを見ることができなくなっていた。おれは落ち着かずに、部屋の中を意味もなくうろうろと歩き回った。気がついたら、何時間も過ぎていた。夕食を取ろうという発想すらなかった。だけど、明日出社してもこの精神状態では仕事ができないと考えて、必死で落ち着こうとした。ふとんの中に入り、寝むれなくても体だけは休めようと思った。

電気を消して、ふとんの中に入っても、おれの頭の中はフル回転だった。気持ちは高ぶっていく一向だった。思考をストップすることができなかった。様々な考えが一気に生まれてきた。気づかないうちに頭をかきむしっていた。おれは不安になると、頭を触る癖が

あった。
どうしても寝むれないので、電気をつけて緑茶を飲んだ。それでも、おれの興奮は収まらなかった。だから、どうせ眠れないのなら、徹底的に考えようと思った。
今後、どうすべきかを必死で考えた。それから、日本にいたら危険ではないかいう考えに思い至るまでたいして時間はかからなかった。
だけど、自分を狙っているかもしれない組織の存在も特定できないのに、どこに逃げればよいのか。おれにはわからなかった。何時間も何時間もかけて考えた。
しまいに、窓から、かすかに朝日の明かりがもれるようになってきた。比較的都会に住んでいるのに、小鳥の鳴き声がたくさん聞こえてきた。意外と、都会にも小鳥が多くいることに気がついた。
そんな風に、一瞬だけ気がそれたけど、すぐに問題を再び考え始めた。早く結論を出さないと、危険なことになる、そう感じた。おれは味方になってくれる組織、あるいは国を必死で考えた。そこで、イタリアが思い浮かんだ。
今度は、イタリアに行っても、安全かどうかを考え始めた。もう、出社の時間まで、あまり残された時間はなかった。イタリアは英語圏ではないし、独立した地位を持っている。それに、おれを卒業旅行に招いてくれるほど、友好的な国だ。イタリア人は陽気で、みんなやさしかったじゃないか。おれはそう考えた。
読む人がいたとしてもおそらく日本人だけだが、もし仮に、きみがイタリア人なら、本気で驚くかもしれない。そうなのだ。おれは一時期、本気でイタリアに亡命しようとしていたのだ。しかし、それをしなかった。その理由はこれから説明したい。
おれは次の日、会社に向かった。電車の中で、目の前に立っている女子高生が口もふさがずにおれに向かって咳をした。おれの全身は震えていた。だけど、反撃はしなかった。
X社に着くと、風早も富田もすでに出社していた。おれは初めて

風早にあいさつせずに出社した。動揺して、それどころではなかったからだ。

おれは会社のパソコンで、イタリアの大使館の位置を調べた。このまま、日本にいたら、得体のしれない組織に連れていかれて人体実験されてしまうと思った。その当時は本気でそう考えたのだ。

しかし、ここで言っておきたいことがある。この考えはおれの妄想かもしれないし、間違いかもしれない。おれを狙っている組織なんて、本当はいないのかもしれない。たとえ、いたとしても、その組織をおれは誹謗中傷するつもりはない。どんな組織とも、仲良くしたいと考えているからだ。そのことをわかった上で、読み進めてほしい。

おれは周りに隠れてイタリア大使館の位置を印刷した。周りからは咳の音が絶えず聞こえていた。早く逃げなければ、そう思った。

「それじゃあ営業に行ってきます」

「おう。早く決着つけてこい」

一応富田にそうことわってから、X社を出た。二度と出社するものかと思った。

会社を出てから、イタリアの大使館を向かう前に大事なものを忘れていることに気がついた。それはパスポートだ。パスポートがなければ、亡命することはできない。

いったん自宅に帰ってパスポートを取ることにした。駅に向かう途中、コンビニで全財産の三十万を下ろした。それから誰にもつけられないようにタクシーに乗った。

一時間近くタクシーに乗り、料金も高かったが構わなかった。どうせすぐに日本円は使わなくなると思ったからだ。

アパートに着くと、最低限の衣服とパスポートをかばんに詰め込んだ。おれはそれから、タクシーで大使館に向かおうとして家を出た。しかし、そんな時に限って、なかなかタクシーは捕まらなかった。電話で呼ぶことも考えたが、タクシーの振りをした組織の車が来たら危険だと感じ、電話で呼ぶことはできなかった。やっとのこ

とで、タクシーを見つけたが、予約をしてあったのか、手を振っても通り過ぎてしまった。
おれは街中をうろうろしていた。電車で行くことも考えたが、途中で咳をする人に止められたらどうしようと思い、電車は使えなかった。
結局、地元を散々歩きまわったあげく、どうしていいかわからなくなって立ち止まった。おれは全財産とわずかな荷物を持って立ちつくした。
おれに声をかける人はいなかったし、相変わらず咳やくしゃみをする人はいなくならなかった。いつのまにか、夕日が落ちかけていた。でも、おれにはのんびり夕日の美しさを楽しむ余裕がなかった。ただ、いったん落ち着く必要があるのは、明確な事実だった。
とりあえず、自宅に戻ることにして歩いていると、携帯が鳴った。電話は富田からだった。
「鈴木、どうしたんだ。なぜ戻って来ない？」
おれが黙っていると、富田が尋ねて来た。
「今日様子が変だったけど、調子が悪いのか？」
「ちょっと調子が悪くて」
「わかった。明日は病院に行け。いいな、休みは申請しておくから、必ず行くんだぞ」
富田は咳をした。
「わかりました」
電話を切って、深呼吸した。おれはよい考えが浮かばなかったので、富田の言う通りに、明日病院に行ってみることにした。
その後、おれが亡命を考えることはなくなった。冷静になってみれば、イタリアに限らず、他の国に、迷惑をかけることはできないからだ。日本の問題を、他の国に押し付けることはできない。だから、おれは、日本に住みながら、なんとかする方法を考えることにしたんだ。
もしきみがおれと同じ立場だったら、どう行動するだろうか。仮

に、おれが考えている通りに、どこかの組織が狙っているとしたら、どう対応すればよいのだろうか。
きみは他の国に亡命するだろうか。それとも、日本に残ってなんとかする方法を考えるだろうか。いずれにせよ、おれが圧倒的に弱い立場にいることに変わりはなかった。
結局、おれは後者を選択することにした。日本に残り、どうにかすることができると考えたんだ。しかし、当時のおれが考えているほど、それは簡単なことではなかった。次回はその話を含めてしよう。

十二　それでもX社に復帰した理由

おれは富田から休みをもらった次の日、総合病院を訪ねていた。病院に着いて、どうすればいいかわからず、散々病院内を歩き回った上で、インフォメーションの看護師に相談することにした。看護師に、咳やくしゃみをされて困っている、組織が狙っているように感じる、そう話すと看護師は精神科を受診するように勧めてきた。
おれは抵抗せずに、看護師の言うことを聞き流していた。受診の順番が来るまで、待合室で待つことになった。この時も、咳やくしゃみを常にされていた。
一時間経っても、自分の受診の順番は回って来なかった。病院内で音楽を聞いているのも変なので、その間ずっと咳やくしゃみに耐えなければならなかった。
待っている間、最近よく待たされていることに気がついた。思い当たるふしがたくさんあった。
外食した時には、食事が出てくるまでに二時間かかった時もあった。他のお客がすぐに料理が運ばれてくるのを横目に見ながら、おれは黙って文句を言わなかった。他にも、されて不快だと思う行為を、数え挙げればきりがないほど、様々な場所で感じるようになった。それは、おれが神経過敏になっているだけかもしれない。でも、

以前は感じることのないことだった。
　おれが文句を言わないのには、理由があった。おれの勝手な推測だが、きみにも聞いてもらいたい。嫌がらせをおれにやっている人達が、脅されているのではないかと思ったからだ。そうでなければ、料理が遅ければ、おれだって文句を言う。でも、おれが文句を言って、その人達が早く料理を出したら、傷つけられる可能性があると考えたからだ。それは、実際には違うかもしれない。だけど、その可能性を考えたら、文句を言うことはできなかった。おれが我慢すればいいことだと思ったからだ。話を戻そう。
　待合室で一時間以上待たされた後、診療室に入ると、統合失調症と診断された。統合失調症とは、妄想をしてしまう病気のことだ。つまり、おれの考えていることは、すべて妄想だと判断されたのだ。診断で、一カ月会社を休むように診断書を出された。
　診察が終わった後、病院から急いで離れた。病院の出入り口には人が多く、咳やくしゃみをする人達がたくさんいたからだ。おれは静かな公園で富田に電話をかけた。その時も富田はなかなか電話に出なくて、早く告げてすっきりしたいおれの気持ちを不安定にさせた。おれが公園内をうろうろしながら何度か電話をかけていると、富田につながった。
「おう。鈴木か。どうした？　今日病院に行ったのか」
「行って来ました。それで言いづらいのですが」
　おれが言葉に詰まると、富田が咳をした。
「なんだ。はっきり言ってみろ」
「実は、精神病と診断されまして。一カ月休むようにと診断書が出されたのですが」
「そうか、困ったな」
　富田が黙ったので、おれは富田の返事を待った。
「わかった。診断書はあるんだな？　とりあえず、それをファックスしてくれ」
「わかりました」

「休みをもらえるかどうかは、上司と相談して決める。また連絡する」
電話を切ると、公園内に鳩が駆けずり回っていることに気がついた。おれの切羽詰まった状況とのギャップの大きさを感じた。
家に帰って、富田からの電話を待っている時は、何も手がつかなかった。今後、自分がどうなるかまったくわからなかった。自分の今後の運命が、X社に左右されているという事実に、自分がコントロールできないものに対する恐怖が溢れてきた。
夜になって、富田から電話が来た。X社では、散々もめたのだろうと感じた。
「鈴木か。休みの件なんだが」
「どうなりました？」
なんだか判決を待つ被告人のような気持ちだった。
「休みはもらえることになった。とりあえずゆっくり休め。休みの終わりが近づいたら、また連絡する」
「わかりました。ご迷惑かけてすいません」
電話を切っても、なかなか落ち着くことができなかった。とりあえず、この一カ月をどうすべきか考え始めた。
だらだらと何もせずに一週間ぐらい過ごした後、おれは英会話学校に行って、退校届けを提出した。英会話学校のスタッフは、半年分ぐらいの授業料を払っているのに、もったいないと引き止めたが、おれはそれでもどうしてもやめたいと告げた。
その時、髭はずっと剃ってなかったので、だいぶ伸びていた。だけど、自分の身なりを気にしている余裕はなかった。
おれは英会話学校をやめた後、日本国内でおれを守ってくれる組織はないかと考えた。国外に亡命しては迷惑だと考えたが、国内の組織に頼る分は問題ないと思ったのだ。これが、最初に考えた、国内にいながら自分を守る方法だった。だから、一時期は組織に属したこともあった。
だけど、咳やくしゃみがひどくて耐えられず、一緒に遊んだりす

る友達もできなかったので、すぐにやめてしまったんだ。誰だって、自分が傷つくことは嫌だ。だから、他人を傷つけることを選択してしまう時もある。それは、悪いことじゃない。それは、責められることじゃない。ただ、おれを守ることはできないことがわかったので、すぐにやめた。

唯一、長く在籍していたのは地元の青年団体だった。友達もできたけど、それも途中でやめた。迷惑がかかると思ったからだ。

ただ、ここで言っておきたいのは、国内の組織について話すことが本題ではないし、批判するつもりもないので、ここには詳しく書かない。おれはどの組織とも、仲良くしたいんだ。もちろん、きみとだって、仲良くしたいと考えている。

休みはゴールデンウィークをはさんでいたので、おれは気分転換に韓国のツアーに一人で行ったんだ。でも、正直なことを言うと、当時はあまりに混乱していて、韓国での記憶はあいまいなんだ。

日中は、繁華街でTシャツを買ったり、チゲ鍋を食べたりした。鍋は一人で食うには、かなりボリュームがあったけれど、おいしかったので最後まで食うことができた。特に、鍋と一緒に出て来たキムチは大好きなので、一番に食べた。

夜になると、街中を一人うろうろとしていた。かなり奇妙な行動をする観光客だった。この当時は、サトラレだと知ったばかりで、かなり混乱していた。ただ、韓国が非常に安全な国だということもわかった。また、韓国の人がおれを温かく迎えてくれたことは確かだ。その理由は後できみにもわかるけど、韓国に対して、本当に、感謝している。

おれは日本に帰国してから、次第に冷静になっていった。韓国での旅行がよい気分転換になっていた。韓国に行かなければ、もっと精神的に追いつめられていたのかもしれない。そう考えると、その時に韓国に旅行したことは正解だった。

本当におれは狙われているのか。おれの勘違いではないのか。おれはサトラレかもしれないけど、亡命する必要はないんじゃないか。

次第にそう考えるようになったんだ。そうやって自分を安心させ、一時期は平静を取り戻したんだ。

一カ月後、おれはX社に復帰することにした。その結論に迷いはなかった。X社をやめることはまったく考えてなかった。おれは自分を信じていたし、外からの圧力に負けてX社をやめてしまったら、それこそ転落人生を歩んでしまうと思ったからだ。

ただ、X社に復帰するまでの間に、向精神薬の副作用と食べすぎで太ってしまったことは気にしていた。そのことは絶対に指摘されるだろうと考えていた。

絶対にやめないと決心したおれだったが、復帰する出社日を迎えた朝は、すがすがしい気持ちとはかけ離れたものだった。苦痛であるとわかっているのに、逃げ場のない、電車内や職場に行き、咳やくしゃみに耐え続けなければ、ならなかった。

おれは電車内や職場に限らず、咳やくしゃみをされることがかなり不快だったんだ。日本に来た外国人が、そばをすすって食う音が不快というが、そんなレベルではない。

どんなことだって、異常な頻度で繰り返せば、拷問になる。おれにサトラレだとわからせるためには、半年もあれば十分なんだ。それを何年も繰り返すということは、おれをいじめているだけに過ぎない。

復帰する出社日に、おれはどうしても出社するのが嫌で、X社の近くにある公園でうろうろしていたことを今でも覚えている。この時の気持ちは、きみにならわかるかもしれない。

どんなことがあっても、おれは出社しないわけにはいかなかったんだ。お金を稼いで食べていかなければいかないからだ。それは誰でも同じで当然のことなのだろうけど、だからこそ、その当然のことを実行するのがいかに困難なことか、それを知ることになったんだ。

きみがバイトでも何でもいいけど、一度でも働いたことがあるのなら、この気持ちを理解できるだろう。働くことは、本当に大変な

ことだ。人は働くことでお金を得て、生活することができる。
お金は、あくまで道具だ。お金に振り回される人生は嫌だけど、だからといって、暮らしていくのに最低限のお金は必要だ。だから、おれはこの時から、貯金をしたり、株を保有したりするようになったんだ。X社をやめるつもりはないけれど、未来にそなえてお金を蓄えておく必要があると思ったんだ。実際に、それは正解だった。そのことは後々わかっていくけれど、今は先に進めよう。

十三　どうしてもX社をやめたくなかった理由

おれは公園でうろうろするのをやめて、X社に向かって歩き出した。公園とX社は二分ぐらいの距離だったが、駅から歩いてくる同僚とは会わない道にあったのでおれには都合がよかった。
エレベーターに乗り込むと、運よく同僚に会わずにX社に向かうことができた。X社の扉を開けておはようございますとあいさつすると、まばらにあいさつが返ってきた。予想していたのと違って、おれが出社しても以前と同じような元気のない空気が漂っていた。風早と目が一瞬合ったが、風早は視線をそらしてたばこを吸いに行った。
「ひさしぶりだな、鈴木」
富田だった。骨折しているらしく、右足にギブスをはめて杖をついていた。
「おひさしぶりです。富田さん。足どうしたんですか」
「サッカーやっていたら、折ってしまってな。それより、元気だったか？　お前ちょっと太ったんじゃないか？」
「ええ、少し太りました」
やはり指摘された。これが向精神薬の副作用だなんてことは、絶対に言いたくなかった。富田は咳をしてから、言葉を続けた。
「しっかり治してきたんだろうな？　これからはもっときびしくいくからな」

「わかっています」
その言葉の通り、富田はきびしかった。風早とは違うグループになったので、今度は富田がおれを叱りつけたのだ。
おれが、始業の十分前に来ると、富田は何十分にも渡って、来るのが遅いとおれを叱りつけた。同じグループに、おれより遅く来ている同僚がいるのに、だ。理不尽だとは感じたが、誰もそれを指摘する同僚はいなかったし、おれも反論しなかった。富田は、手を上げることはなかったが、精神攻撃は容赦がなかった。何度もおれにやる気がないなら帰れとどなった。だけど、おれは一度も途中で帰ったりしなかった。富田が興奮すればするほど、おれの心も頑なになっていった。おれは自分のことを根性無しだと思っていたが、実際にX社に入ってみると、X社をやめようとは考えなかった。むしろ、反発心で、絶対にやめないでやると思った。
おれは、富田に怒鳴られている時、富田の前で何度も涙した。たとえ、涙は流しても、おれは富田に屈したわけではなかった。心は半分折れかかっていたけれど、魂が屈したわけではなかった。
富田はおれを怒るたびに、話の締めになると、自分に同情するような人間にはなるな、と言った。それが、富田の口癖だった。おれはその言葉が嫌いだった。だけど、冒頭で話した通り、考えようによっては、価値のある言葉だったと、今は考えている。
富田は、明らかに、おれに同情していたが、そのことを口に出すことは一度もなかった。富田はどうしてもおれをX社から追い出したかったようにおれは感じたが、何があろうと、X社をやめるつもりはなかった。
おれをやめさせたいのなら、首にすればいい、そう思った。簡単なことだ。おれをいじめるのが大丈夫なのなら、おれを首にすることなんてもっと些細なことだ。いっそ、首にされたいとさえ、思っていた。首になったのなら、それはおれがX社に、世間に、屈したことにはならないからだ。
どんなに咳やくしゃみをされても、どんなに理不尽なことで怒ら

れても、毎日おれだけ一人で昼飯を食おうとも、向精神薬で頭が働かなかったとしても、決してやめようとは思わなかった。おれは意地になっていた。

自分よりも強い者に屈することが、昔から嫌いだった。力がある者が偉いわけではない、そのことを、身を持って証明したかった。いつからか、一人で永遠に行う我慢大会のような状態になっていた。X社をやめないことが、生きる目的になっていた。

いくら追いつめてもやめようとしないおれに対し、富田の怒る顔はだんだん苦痛で滲んできた。ある時、ストレスでできた胃潰瘍がひどいと同僚に話しているところをたまたま聞いてしまった。そんな富田は自分に同情しているのではないかと考えたが、かわいそうなので、聞かなかったことにして、指摘しなかった。

富田はきっと、自分に同情するような人間にはなるな、そう自分にも言い聞かせていたのだ。富田はいつも強気な振りをしていたが、そういう繊細な部分を隠し持っていた。おれはそのことを見抜いてしまったために、富田のことは好きではなかったけれど、嫌いにもなれなかった。

それに、富田を一概に悪者と決めつけることはできなかった。それは富田に限らず、すべての人に言えることだった。脅されていたのかもしれないからだ。

人間は、物理的な痛みには弱いものだ。どんなに心が強い人でも、物理的な痛みを与えられると逆らえなくなってしまう。

おれはそのことをしょうがないことだと考えた。精神的に強い人間なんていないのだ。誰もが、弱い自分を抱えている。それは、おれにしても、同じことだった。

おれが他人に反撃しなかったのは、精神攻撃だけだったからなのかもしれない。物理的な痛みが伴えば、反撃に転じていたのかもしれない。だけど、個人に反撃することは、おれのポリシーに反する。そうなってみないとわからないけど、たとえ物理的な痛みが伴ったとしても、おれは個人には反撃しない気がした。でも、それはその

状況になってみないとわからないことだ。
　それでもおれは耐え続け、Ｘ社に出社し続けた。休日はできるだけ、友達と会うようにしていた。何十人もいた友達は、だんだん減っていった。それでも会ってくれる友達もいた。
　会ってくれた友達は怪我をするようになったんだ。だけど、具体的な話をしようとは思わない。それは、偶然かもしれないし、断定はできないからだ。それに、一人一人の状態をおれが挙げていったとしても、おれのためにも、きみのためにも、ならないと思う。おれは憎しみを増やすためにこの手紙を書いているわけではないからだ。同僚や友達に怪我した人が多数いたことは確かだ。だけど、それを誇張して書くべきではないし、重要なことではない。重要なのは、いかに仲良くすべきかだからだ。
　友達は時間が経つごとに少なくなっていったけど、おれは会ってくれない友達を責めたりはしなかった。自分から連絡を取ることをできるだけやめるようにした。それが、おれにとっての、友情だったからだ。
　おれはどんなに怒られても、結局Ｘ社をやめなかった。２００９年の三月になっても、Ｘ社で働いていた。おれはこのままならば、まだ頑張ることができる気がしていたんだ。
　きみはここまで読んできて、どう思っただろうか。仕事や暗い話が中心になってきて、飽き飽きしているのではないだろうか。次の話では、いったん仕事の話は置いといて、恋愛の話をしたい。その方が、話に変化があるし、きみにとっても、興味を持って読み進められると思ったからだ。では、次の話に移ろう。

十四　人見に告白しなかった理由

　少し時間を戻すけど、２００８年の秋に、二度目のサイパンに行った。サイパンは好きだ。手軽に行けるし、ダイビングするには、最高だ。サイパンでは夕日の写真を撮り、年賀状に印刷したりした。

それは、その年で一番気にいった写真だったからだ。南国の夕日は、情緒があって、美しい。

その後、なんとか仕事に耐えながら過ごし、２００９年のゴールデンウィークが近づいていた。おれは特に予定がないまま、ただ仕事をこなすだけの日々を送っていた。

そんな時、友達からゴールデンウィークにトルコに行かないかと誘われた。おれは旅行が好きだったし、最近は遊びに誘ってくれる友達もほとんどいなかったので、すぐに了承した。

今回はトルコでの出来事の話をしたい。もちろん、おれが詳しく話すのは、恋愛が絡んでいるからだ。

ゴールデンウィークが近づいてくるにつれて、世界的にインフルエンザが流行っているというニュースが流れていた。おれは富田に海外旅行に行くことを話さなかった。空港はいろんな国の人がいるので、インフルエンザに感染する危険性を指摘されて、行くなと命令されるに決まっているからだ。

富田には、何も言わないまま、おれはトルコに向かった。後ろめたい気持ちはあったけど、それよりも必死で耐えている自分へのご褒美が必要だと考えていた。

トルコでは、バスツアーで周った。バスツアーには、若者が多く、同年代の人がたくさんいた。学校のクラスの中に、数人ぐらいは好みの女性がいるように、おれはバスツアーの中で、何人か好みの女性ができていた。

人見は、おれがバスツアーの中で気にいった女性の一人だった。人見は、エフィソスの遺跡で、違う国の観光客に囲まれて談笑していた。おれは遺跡を眺めるふりをして、こっそりと人見を観察していた。

人見の堂々とした姿が、他の日本人には見られないものだと感じた。青空が広がる遺跡の中で、観光客と話す人見を見ていると、自分までも誇らしい気持ちになった。

ただ、おれは自分から人見に声をかけることをしなかった。それ

は、照れ屋だからというのもあるのだけど、それ以上におれと仲良くすると迷惑がかかると思ったからだ。
旅行の中盤になっても、特に仲のよい女性はできなかったし、人見とも会話をしなかった。
旅行が進んでいくと、疲れからかバスの中でうとうとすることが多くなっていった。レストランに着くと、おれは起きてバスを降りた。その時に、後ろから服のそでを引っ張られた。おれの服のそでを引っ張ったのは、人見だった。
人見を近くで見たのは、初めてだった。人見は黒髪のショートカットが似合っていて、肌の白さが際立っていた。
「鈴木くん、だっけ？　イスタンブールでの自由行動の時、オススメの観光地ある？　あまりよくわからなくて」
おれは初めて人見に話しかけられたことに舞い上がり、饒舌に説明した。日本で、本屋に置いてあるトルコのガイドブックはすべて目を通しておいたので、頭の中にある地図をわかりやすく話した。
人見と話しているうちに、人見がイスタンブールの地図を持っていないことに気がついた。おれは二枚持っていたので、人見に一枚あげた。
「ありがと。鈴木くん。また教えてね」
人見が笑顔になると、少し目尻が下がった。そんな表情が、人見の印象をより柔らかくしていた。人見がレストランで待っている、友達のところにかけていく後ろ姿を眺めていた。
明るい黄色のワンピースから覗く、白くて細いふとももが、トルコの開放的な空気とマッチしていて、おれの視線をくぎ付けにした。
それからは、しぜんと人見と会話するようになっていった。カッパドキアに悠然とそびえ立つ奇岩を見ながらお互いの感動を伝えたり、カイマクル地下都市に入りながら神秘的な雰囲気を味わったりした。
人見はいつも声優のような、心地よい高さの声でおれに尋ねてきた。それが、くすぐったくて気持ちがよかった。おれは、人見の淡

いピンク色に染まった頬も好きだった。
栄子、琴美、早乙女、由紀に続いて、人見との恋愛の話をすると、もしかしたらきみは、おれのことを惚れっぽい人間だと思うかもしれない。別に否定はしない。実際に、おれは惚れっぽい人間だからだ。
人見と会話するようになってから、すぐに旅行の終盤へとさしかかった。イスタンブールに着いた夜に、バスを降りたところで、人見から声をかけられた。
「今日の夜の自由時間に、観光に行くの？」
「行こうと思っているよ」
「そうなんだ。一緒に行ってもいい？」
おれは振り返って人見の表情を見た。もう、日が落ちていて暗かったけど、人見は真剣な表情でしっかりとおれを見つめていた。
「もちろんだよ。一緒に行こう」
おれがそう返事をすると、人見はいつもの少し目尻が下がった笑い方をした。そんな人見の笑顔を見るたびに、おれの心は惹かれていった。人見と待ち合わせの時間を決めて、それぞれの部屋に戻った。
ホテルの近くに地下鉄はあったけど、海外で電車に乗った経験がなかったため、念のためタクシーを使ってアヤソフィアに向かった。
アヤソフィアに着くと、同じバスに乗っているツアー客がいた。アヤソフィアのライトアップを見てながら、はしゃいでいる人見がいた。おれは人見と手でもつなぎたい気分だったが、結局口には出せなかった。
最終日のイスタンブール観光は、お互いに友達がいたので、別々に行動した。途中に、トラムに乗る人見と出会った。手を振ってくれる人見を見ていると、一緒に周ることを提案すればよかったと、少し後悔した。
もう人見とは、すっかり仲良くなっていたので、帰りの飛行機の乗り替えの待ち時間では、ずっと一緒にＤＳをして遊んでいた。お

れは、トルコの旅行だけで、人見と会えなくなってしまうのは嫌だった。いつのまにか、人見がおれの中で大きな存在となっていた。おれはＤＳをやめて飛行機に搭乗しようとする時、勇気を出して、人見の携帯のアドレスを聞いた。人見はアドレスを紙に書いて教えてくれた。おれは有頂天だった。女性と関わったら、迷惑をかけるとか、そんな考えは一切消えていた。それよりも女性を愛したかったし、愛されたかった。

飛行機に乗ると、日本まではかなり時間があった。人見のアドレスを聞けた嬉しさから、人見のことをずっと考えていた。疲れもあって、思考がまとまらなかった。だんだんと、おれは人見とエッチなことをしている妄想が浮かんできた。普段は多少コントロールできるのに、疲れているせいか、妄想が止まらなかった。おれはサトラレなので、近くの座席に座る人見に伝わってしまうと感じた。音楽を聞いて気分を変えようと思ったが、余計に妄想はエスカレートしていった。何度も、何度も、繰り返し妄想を描いた。人見の、おれに対する印象は最悪なものに変わってしまったかもしれないと思った。

日本に帰国してから、人見とは別れのあいさつをする機会がないまま、自宅に向かうことになった。早く体を休めたかったし、アドレスは聞いていたので、成田空港で会う必要はなかった。自宅に着いてから、人見にメールを送った。

すぐにメールの返信が来て、開いてみると、人見からではなく、アドレスが間違っていると送られてきた。そんなはずはないと思って確認してみたけれど、やはり送れなかった。人見はアドレスを書き間違えたのだろうか。それとも、おれからメールが来るのが嫌で、アドレスを変えてしまったのだろうか。きみはどう思う？

おれは人見と連絡を取りたいと思った。人見を簡単に諦めることができなかった。やっと、おれが愛し、愛される可能性を持った女性が現れたのに、この機会を逃したくはなかった。

おれはいけないと思いつつも、旅行の前日に注意事項を連絡する

ために電話をかけてくれた添乗員の連絡先が残っていたので、電話をかけてみた。人見のことを相談しようと思ったのだ。

添乗員に電話をして、事情を話した。もちろん、添乗員がお客の個人情報を教えられないことはわかっていた。だから、添乗員におれのメールアドレスを教えて、人見に伝えるようにお願いした。おれは人見からアドレスを聞いたけど、自分のアドレスは教えていなかったのだ。

おれの行動はずうずうしいかもしれない。人見から、嫌がられるかもしれない。だけど、連絡しないまま、もやもやした気持ちで過ごすより、人見の気持ちをはっきりと確かめたかった。その結果、人見がおれのことを嫌いになっていたとしても、しょうがないと考えた。

添乗員は、お客様の個人情報は旅行が終わると一切見ることができなくなると話したが、ただ旅行の前日に電話した履歴が残っているので連絡してみると言ってくれた。おれはお礼を言い、電話を切った。

ゴールデンウィークが終わってX社に出社すると、富田が休みの間に、何していたか聞いてきた。おれは隠す必要はないと思ったので、トルコに旅行したことを話した。富田は、インフルエンザがX社に広まったらどうするんだと、散々どなりつけた。おれは言い訳をせずに黙って耐えていた。だけど、今は仕事の話ではなく、人見との話をしたいので、話を元に戻そう。

おれが添乗員に電話してから一週間後、一緒にトルコに行った友達から電話が来た。友達は、おれの気付かないところで人見と連絡先を交換していたみたいで、人見からメールが来たと話していた。添乗員は人見に連絡してくれたようだった。友達が知っていたのなら、わざわざ添乗員に連絡する必要はなかったのかもしれないが、その時は知らなかったのだ。

人見がおれに渡したアドレスが間違っていたことを気にして落ち込んでいるので、メールしてあげてほしいと友達はおれに告げた。

おれは友達から正しいアドレスを聞いて、人見にメールをした。それからは、人見とメールするようになった。

人見は、おれがメールを送ると必ず返事をしてくれた。この時になると、おれとまともに連絡を取り合っている女性は人見ぐらいだった。

人見は、おれを横浜の中華街に誘った。おれは人見と一緒に、中華街でデートした。二人で、飲茶の食い放題にチャレンジしたり、ぶらぶらと歩いてまわったりした。この頃には、おれはかなり精神的にまいっていたので、あまり量を食えなかった。

人見は中国が好きで何度も行ったことがあるらしく、中国での思い出を語ってくれた。人見の中国に対する愛情が、おれにも十分に伝わってきた。おれは中国に行ったことはなかったが、中華料理も中国の伝統楽器の二胡の音色も好きだった。

人見はこの後に用事があると話していたが、おれと中華街を歩いていると、少しぐらい遅れてもいいと言ってくれたので、人見と一緒にいる時間が増えて嬉しかった。

人見と一緒にショッピングしながら歩いている時、おれが軒先で販売している甘栗を買ったら、店員がサービスしてくれて二倍ぐらい入れてくれた。とても気前のいい人だった。

しばらく歩いていると、時間が経ってしまって、別れの時間がやってきた。人見とは、もう当分の間会えなくなる、そんな気がした。おれは手を振る人見の姿を目に焼き付けて、電車を降りて乗り替えた。

その後、おれは人見に連絡をしなくなった。人見に告白することも考えたが、きっと人見はおれを振るだろう。そんな気がしたんだ。これでは、人見に告白しなかった理由にはならないかもしれない。だけど、おれは人見に迷惑をかけたくなかったんだ。だから、人見と連絡を取ることをやめた。

おれは今でも人見と連絡を取っていない。連絡を取ることはできる。人見はたぶん返事を返してくれるだろう。だけど、おれは人見

のやさしさに甘えて連絡することはできない。
現在、トルコに一緒に行った友達とも連絡は取っていない。おれが連絡を取ることで迷惑をかけるわけにはいかないからだ。
きみはここまで読んでどう思っただろうか。この小説の中で、女性との恋愛の話はここで終わりだ。でも、今まで書いてきた女性との恋愛の話は、無駄だとは思っていない。載せたのには、ちゃんと意味がある。それは、きみがこの手紙を最後まで読めば、理由はわかると思う。さあ、次はまた話を戻して、X社での出来事を話そう。

十五　X社をやめなければならなかった理由

トルコに行ったゴールデンウィークから少し時間を戻して、おれが就職してから三度目の春を迎えた２００９年の四月に、X社の本社は引っ越しをして、片づけ作業に追われていた。経営状況が悪いらしく、リストラも大幅に行ったとのことなので人数が減っていた。最初に首になってもおかしくないおれを、なぜ首にしないのか、不思議だった。おれも整理を手伝っていると、富田がおれの肩を叩いてきた。
「鈴木、話がある。一緒に応接室に来てもらっていいか」
おれは富田のあとについて応接室に向かった。富田は応接室に着くと、たばこを吸いだした。
「鈴木に話がある」
「何ですか」
おれは何を言われるのか見当がつかなかったが、それでも心臓が高まった。
「風早の退職が決まった」
「そうなんですか？」
「鈴木、お前だって危ないんだぞ。精神病で会社を休んでいるんだからな。次休んだら首だと思え」
「わかりました」

首、その言葉がおれの中で反芻された。社会的脱落者になるのだけは嫌だった。
「おれと鈴木の二人だけのチームになり、これからは新規開拓をすることになった」
「新規開拓ですか」
「そうだ。今まで持っていた顧客からも外れてもらう」
「ということは、もう値下げどうこう言われずに済むってことですか」
「まあ、そうなるな」
おれは思わず微笑んだ。
「鈴木、何か勘違いしているようだが、この新規開拓はあまいものじゃないぞ」
「わかっています」
だけど、おれは本当の意味で、これが何を意味するかわかっていなかったんだ。この時、会社でのいじめ包囲網が、最終段階に入ったんだ。それに気付いたのはつい最近のことだ。話を進めよう。
風早が退職して一週間、おれは新しい仕事をしていた。いや、正確には、たいした仕事などしていなかった。
新規顧客リストをもらったが、新規顧客リストといっても、大した数ではない。一人の割り当てが三社程度だ。おれは席を立ち上がり、富田に話しかけた。
「このリストをもらって、何をすればいいんでしょうか」
「人に聞くことばかり覚えていないで、まず自分で考えろ」
「わかりました」
いつも富田から報告・連絡・相談のほうれんそうだと言われていたのに、これは矛盾するのではないかと思った。少し考えてもわからなかったので、今度は角度を変えて富田に相談した。
「とりあえず、リストに載っている会社に電話してもいいですか」
富田は舌打ちをした。
「まずその前にやることがあるだろう。経理にリストの会社の財政

状況を調べてもらうんだ」
「わかりました」
おれは頭に血が上るのを我慢しながら、さっそく営業部を出て、リストの財政状況を調べてもらった。結果はすべてだめだった。だんだんと自分の置かれた状況というものがわかってきた。
渡された顧客リストは、使えないものだった。ということは、何を仕事にすればいいのだろう。
自分の席に戻る道のりで考えていた。これはもしかしたら、とおれは思った。自分の立場というものは、思っているよりも危ういものなのかもしれない。
おれがその後、X社でどんな仕事をしたのだと思う？　きみならば、X社にそれでも貢献する方法を見つけたのかもしれないね。でも、おれにはどうすればいいか、わからなかったんだ。だから、おれは一日中ネットサーフィンしていたんだ。
それからもおれは毎日X社に出社し続けた。
富田の、次休んだら最後という言葉が重くのしかかっていた。
なんとか定時まで耐えて、いつものように満員電車に揺られて帰った。電車の中は、マスクをする人達で溢れていた。もう限界だった。
おれの前を座っていた人が立ちあがって降りた。すかさずその席に座った。近くの咳から、咳をする声が聞こえてくる。それに対しおれができることは音楽の音量を大きくすることだけだった。
その時、おれの隣の座席に座っているＯＬが居眠りしておれによりかかってきた。たったそれだけのことで、おれの胸は高まった。おれはできるだけ動かないようにして、なんとか彼女を起こさないようにした。
おれの中に、なんとも言いようのない気持ちが芽生えていた。この気持ちは、きみになら、わかるかもしれない。
電車の中で、たまたま隣にいた女性が眠りについただけなのかもしれない。それでもおれは、誰かが頼ってくれているようで、本当

に嬉しかったんだ。
　おれは誰からも頼られることもなく、期待されることもなかった。おれはX社にただ出社するだけで、何もしていなかった。そんなおれでも、誰でもよかったかもしれないけど、頼ってくれる女性がいた。たとえ、電車の中で寄りかかるという、ちょっとした行為だったしても、おれにはありがたかった。それが、おれの心を激しく動かした。
　おれの目は、もしかしたら、真っ赤になっていたかもしれない。だけど、涙は流さなかった。高まる感情をなんとか押さえ、隣で寝ている女性を起こさないようにした。おれは、彼女にありがとうと言いたかった。見ず知らずの人から、励まされることがある。言葉をもらうよりも、彼女の気を許した行動が、おれの心に深く響いた。おれはもう少しだけ、頑張れると思った。
　その頃になると、花粉症の時期は去ったけど、街中はマスクをする人で溢れていた。　社内ではマスクをつけている人が、半数以上に上っていた。トイレに行くと、インフルエンザ用の消毒液が置かれていた。
　おれはさらに混乱した。日増しに、咳やくしゃみをする人が増えていったからだ。だけど、おれはひたすら我慢した。一言も、文句を言わなかった。でも、仕事中は逃げ場がなかった。
　おれには与えられた仕事がないので、集中してごまかすこともできなかった。その場にいてもたってもいられなくなり、どこかに逃げ出したい気持ちでいっぱいになることも多かった。しかし、席についていなければならなかった。
　ある時、おれは椅子に座ったままいらいらして、貧乏ゆすりをした。急に周りの人と一緒にいることが怖くなった。
　おれは時間を持て余していた。社内にいることが耐えがたかったから、毎日大量に抗不安薬を飲んだんだ。
　抗不安薬を飲んでしばらくすると、ゆっくりと効いていき、頭はぼんやりと働くようになった。

でも、また三十分もすると、おれはその場から逃げだしたくなった。それでも我慢していると、吐き気がこみ上げてきた。

おれは急いでトイレに駆け込んで吐いた。

これが、何日も、何日も、何日も、エンドレスで続いた。おれはこの生活を何カ月も繰り返したんだ。それは、壮絶な時間だった。狂ってしまうと、本気で思った。

おれはどんなに仕事が忙しかろうと、どんなに怒られようと、なんとか耐えることができた。だけど、仕事がないことに対しては、どうしても耐えられなかった。他の拷問はともかく、お前のやっていることは無駄で、存在価値はないんだと言われているようで、耐えられなかったんだ。

それに、咳やくしゃみもひどかった。そのことをミクシィで書いたりもした。

人は、一定のスピードで落ちてくる水滴を、たとえば額で受けたとして、たぶん三日と言わず発狂すると思う。それはきみだって、例外じゃない。

水滴だって、人を狂わすのに三日もあれば十分なんだ。それを一定のタイミングでなく、不定期に、いろんな人から咳やくしゃみをされる。通りゆく知らない人々が、いきなり咳やくしゃみというムチで、おれの心を激しく叩くんだ。それに対して、おれはずっと無抵抗を貫いているんだ。それは家でも電車でもX社でも変わらない。こう言ったら失礼かもしれないが、一日だっておれと入れ替わったら、きみは耐えることはできないだろう。

しかも、毎日、やることもなくX社に出社し、周りから無視される。だからおれは何度も吐いてしまう。そんな日々を繰り返した。

ある日、定時を過ぎてから、会社内で富田に、もう耐えられそうにないと相談した。富田は、調子が悪いなら、長期休暇を取るべきだと言った。X社をやめろとは言わなかった。その上、病院の診察日まで、短時間勤務を申請してもいいと告げた。

富田は、おれに同情的だった。その時の、富田の表情が、今でも

おれは忘れることはできない。精いっぱい強がって、笑って見せた富田の表情からは、余裕が感じられなかった。　足を骨折した頃の富田の方が、まだ笑顔が嘘臭くなかった。

自分に同情するなと言いながら、富田は明らかにおれに同情していた。少なくとも、おれはそう感じた。でも、おれは富田の言うように、病院の診察日まで、短時間勤務をしたりしなかった。それが、おれのできる精いっぱいの、現状に対する抵抗だった。

おれはなんとか数日耐えて、病院で診断書を書いてもらい、会社を休んだ。おれは確か二カ月ぐらい休みをもらったと思うけど、定かではない。しかも、この時、何をやったか、ほとんど覚えていない。毎日、ただじっと閉じこもって生活していた。実りのある日々とは言い難かった。

休日が終わる頃になると、おれは診断書を再び書いてもらい、休日を延長した。今思えば、よく首にならなかったと思う。X社はきっと、おれをやめさせたかったのだろうけど、自分達から首にすることはできなかったのだ。あくまで自主的にやめさせることが目的だったのだろう。

それから、休日が終わりに近づくと、おれは再び地獄の生活に戻ることを覚悟して、X社と連絡を取った。

X社の総務は、おれの処遇をどうするかについては触れず、とりあえず会社に来てほしいと告げた。

休日が終わって出社すると、応接室には総務の人がいた。総務の人は、笑顔で雑談を交わした後、本題に入った。

結論を言えば、富田とおれが働いていた部署はなくなってしまったらしい。だから、おれの働く場所はないとのことだった。その説明を聞きながら、おれはできるだけ冷静に対処しようと心がけた。

総務の人は話を続けた。どうしても働きたいのなら、高卒と同じ扱いで、工場の現場で雇ってもいいと言われた。ただ、その仕事も、いつまであるかわからないとのことだった。

おれはその話を聞いて、なぜ首にしないのだと思った。X社が、

何が何でもおれをやめさせたいのは、確かなことだった。少なくとも、おれはそう感じた。

それなら、ただひとこと、首だから明日から来なくていいよと告げればすむことだった。それをしないのは、あくまで、おれを自主的にやめさせたかったからだ。その理由は、当時はわからなかったが、今なら推測できる。

総務の人から、やめるかどうか、時間をあげるので考えてほしいと告げられたが、おれは即答しなかった。

しばらくの間、自宅で今後どうすべきか、考えた。おれは何度考えても、耐えられる自信がなかった。おれの心は、折れていた。おれは総務に人に電話をして、退職したいと申し出た。２０１０年の１月だったと思う。

Ｘ社の人々にお世話になったお礼を話したいと思ったが、総務の人に、もう働いていた部署はないので、行っても邪魔になるだけだと忠告されたので、行けなかった。

おれが退職の手続きをしたのは、ホテルのロビーだった。Ｘ社の人々に別れのあいさつができなかったので、代わりに、総務の人に、菓子折りを二つ渡して、別れのあいさつをしてもらうように頼んだ。

総務の人は、これからを期待していたのに残念だと心にもないことを言った。おれはお礼を告げて、真摯に対応した。悪態をつきたくはなかった。誠実に対応することが重要だと思った。

その日の夜、おれは富田に電話した。富田は明るい声で、また元気になったら、働けばいいじゃないかと笑った。声だけだったので、富田の真意は計りきれなかったが、無理にでも元気づけようとしていのが伝わってきた。

おれは不覚にも、富田と話しながら、泣いてしまった。おれは、くやしかった。世間の圧力に負けて、Ｘ社をやめることになってしまったことが、おれの心を激しく切り裂いていた。それは、修復することができない程の傷だった。おれは富田の話を聞くのが精いっぱいで、ただただ泣きながら、はいと繰り返し返事をした。富田に

今までお世話になったお礼だけは告げて電話を切った。
電話を切ると、部屋の中は不気味な程に静かだった。こんな時に、そばにいてくれる女性がいたのなら、そう願わずにはいられなかった。一人で寝るのが、さびしかった。隣で寝てくれる女性がいるだけで、どれだけ安心して眠れることだろうと思った。
おれは結果として、X社をやめた。だけど、おれはX社の人々とX社を悪いとは思っていない。むしろ、感謝している。その理由は、もちろんある。だけど、それはおれの一人よがりな妄想かもしれない。そのことを前提に聞いてほしい。
これはおれの仮説だが、本当は、X社なんて存在しなかったのだ。ただの、名前だけのダミー会社だったのだ。ただ、おれを勤めさせ、やめさせるためだけに存在した会社なのだ。本来なら、風早におれがいじめられた時点で、おれはすぐにやめると思われていたんだ。実際に、おれは大学生の頃にバイトした時には、二週間でやめることもあったぐらいの根性なしだった。
だけど、おれはX社に関しては、簡単にやめたりはしなかった。圧力がかかればかかるほど、おれは負けないように粘った。
風早がいじめても、富田がいじめても、おれをやめさせることはできなかった。だから、最終的に、おれから仕事する権利を奪ったのだ。具体的な業務を与えないという、残酷な仕打ちだったが、おれをやめさせるためには仕方なかった。
X社がダミー会社なら、海外の営業支社だって、ダミー会社だ。おれは海外の営業支社に呼ばれていて、とりあえず日本から追い出すように命令されていたのではないか。もちろん、真相はわからない。だけど、そのために、X社の人々がおれをいじめてもやめさせる必要があったのではないか。海外の営業支社に呼ばれていたために、おれをX社が自ら首にすることはできなかったのではないか。
おれが英会話学校に英会話を習いだした時、富田が風早の仕事が終わるのを待つように言ったのは、おれに英語の勉強をさせないためだったのではないのか。

なぜ、X社の本社は引っ越しをしたのか。それは、おれがこんなに長く仕事を続けるとは思っていなくて、場所の確保ができないために、引っ越したのではないか。おれが仕事をやめる時、X社の人々にあいさつをしようとしても、総務の人に行くなと言われて、ホテルで退職の手続きを取ったのは、すでにX社が存在していなかったからではないのか。X社もX社の人々も悪役を演じることで、おれを守ってくれたのではないか。

そう考えると、日本は弱い。そういう方法しか取れないというのは、あまりに弱すぎる。日本が逆らえなくて、なおかつX社の営業支社がある国は、一つしかない。

だけど、おれはきみにその国の名前を挙げようとは考えていない。その国の印象を悪くすることが目的ではないからだ。それに、おれの考えていることはあくまで推測であり、間違っているかもしれないからだ。たとえ、合っていたとしても、おれは悪く言うべきではないと思う。なぜなら、戦うことが目的ではないからだ。戦って、どうする？　お互いに傷つけ合うだけで、誰も得をしない。そんな利益にならないことを、きみだって賛成しないだろう。だから、暴力による行動も、おれは嫌いだ。憎しみを持って行動すれば、憎しみが広がってしまうからだ。おれが目指しているのは、そういうことじゃない。

おれが考えていることは、まるっきり逆だ。仲良くしたんだ。敵対したって、お互いに不快になるだけだ。おれはその国とも、その国の人々とも、仲良くしたいんだ。きっと、わかり合えるはずだ。それは、きみと仲良くしたいと考えていることと、同じことだ。

ここまでが、おれがX社をやめた理由だ。きみはどう思っただろうか。おれのような結論には至らないかもしれないが、少なくとも、おれがすべての人と友好を求めていることは、きみにも伝わったはずだ。

次は、X社をやめた後のことを話そう。この手紙も、終盤に差し掛かってきた。あと少しなので、きみが最後までこの手紙を読んで

くれることを願う。

十六　人々の幸福と平和を祈った理由

おれは２０１０年の１月にＸ社をやめた。やめた後は、とりあえず暇だった。やることはなかった。ハローワークに失業申請して、三カ月の待機後に失業手当をもらう手続きを取るぐらいだった。

貯金はある程度していたので、贅沢をしなければ、お金にはそれほど困らなかった。

毎日、家の中でネットサーフィンをして過ごしていた。外に出れば、咳やくしゃみをする音で溢れていた。友達もほとんど会ってくれないので、一人で過ごす時間が増えた。毎日が代わり映えのしないものだったので、時間が過ぎるのが早く感じた。ふと気がつくと、Ｘ社をやめてから数カ月経っていた。

このままではだめだと思い、４月頃から経理で必要な資格の簿記を勉強し始めた。転職したら、経理として働こうと思ったからだ。簿記のために一カ月以上時間を割いたが、結局途中でやめてしまった。確かに、おれは勉強していれば、簿記の資格を取ることはできたかもしれない。だけど、資格を取っても、問題は解決しないと思った。

どんな会社に再就職しようと、またいじめられて、会社を追い出される可能性が高かった。拷問のような日々を送るかもしれないと思うと、再就職する気にはなれなかった。

以前から、日々の不満は、ミクシィに書きこむようにしていた。おれは考えを文章に書きながらまとめるタイプだった。いろいろ書いているうちに、様々なことに気づくようになっていった。特に、Ｘ社をやめた後は時間があったので、考える時間は豊富にあった。

２０１０年の６月か７月頃になって、今までずっと休んでいた速読に出席した。それは、速読の講師に迷惑をかけると思って休んでいたのだ。そこで、目をつぶってイメージ訓練をした時に、地面が

地震のように揺れて、何度やっても崩れるようになってしまうことに気がついた。きっと、心が傷つきすぎて、イメージが崩壊してしまうのだ。

そうやって、速読の訓練をしていると、突然あることを思い出した。わけもなく、浮かんできたんだ。それは、中学の先生が、近親婚を繰り返すと天才が生まれることがあると話していたことだ。サトラレは天才だと思われているので、おれにも関係あると思い、ネットで近親婚を調べてみると、意外なことがわかった。

検索で引っかかったのは、天皇だった。おれはパニックに陥った。サトラレと天皇の関係性に、おれは驚愕した。そんなはずはないと思いながらも、おれはサトラレと天皇に、特別な待遇という、共通点を見いだしていた。否定したい気持ちでいっぱいだった。おれは一日中自転車をこいだり、電車に乗ったりして、頭を落ち着かせようとしていた。

電車に乗りながら、おれは天皇の戦争責任について考えた。自分が天皇だと思うようになって、一番初めに考えたのは、戦争責任だった。考えていくうちに、電車の中にも関わらず、人目をはばからず、激しく泣いた。

人生で一番悲しかったし、自分の先祖がどうしても許せなかった。涙はいつまでも止まらなかった。どうしても気分が落ち着かなくて、電車を降りた後も、何時間も自転車をこいだ。しばらくの間、まともに食事を取ることができなかった。傷ついた人達のことを考えると、飯を食う気にはなれなかった。

サトラレの能力を持つ天皇を神格化して、戦争を正当化しようとした。その事実に、涙が止まらなかった。自分の能力を利用されるくらいなら、自殺してでも止めるべきだった。でも、おれの祖先はそうしなかった。そのまま、生きながらえた。見せかけだけの国の王だったとしても、国の王として、責任を取らなかったことが、どうしても許せなかった。

国の王として、自殺して途中で責任を投げ出すことができなかっ

た、許されなかったのかもしれない。だけど、もう敗戦が決まったのだから、そこまでは国の行く末を見極めて、命や財産を差し出してでも、残された人々を守るべきだった。残された人々というのは、もちろん、日本人に限らない。なのに、それをしなかった。

国外、国内に関わらず、多くの人が傷つき、多くの人が死んだ。その人達の恨み、つらさ、苦しみが、おれの中で溢れてくるようだった。つらくて、苦しくて、涙が止まらなかった。どんなに時が経とうとも、天皇は国の王だったのだから、戦争責任は追及されると思った。

自分が、人に恨まれていることを知り、どうしても謝りたくなった。だから、おれはそのことをミクシィで書いた。おれは読んでくれる少数の人に謝ったが、許してほしいとは言わなかった。

それは、絶対に言うことができなかった。安易に許されるものではなく、許すか許さないかは、おれが決めることではないからだ。だから、天皇に責任がなかったとは言わなかった。もちろん、生まれてなかったなんて言い訳はしたくなかった。

それに、おれが天皇として即位したとしても、多くの人の前で謝ることは難しいだろう。おれが謝れば、政権を取っている与党が責められ、内閣が辞職にまで追い詰められる可能性がある。それは政治不介入という、おれの考えに反するからだ。

おれは元々、権力に興味のない人間で、それよりも小説を書くことや写真を撮ることの方が、興味があった。おれは内向的で、上がり症で、才能のあるなしを除いて性格だけを見れば、芸術家のような特性を持っていた。

そんなおれの祖先が、天皇だとは、信じ難かった。だけど、おれにはそれが真実に思えた。おれは誠心誠意、謝った。おれにできることはそれだけだった。きみも、この話が無関係でないと言うのなら、この場を借りて、謝りたい。

それから、おれは、天皇家が権力者に常に利用され続けていたことを知った。だから、おれはミクシィに様々なことを書きこんだ。

おれは、貧乏になってはいけない。貧乏になると、権力者のいいなりになってしまうからだ。

おれは選挙権、被選挙権を持つべきではない。政治に関わる権利を残しておくと、やはり利用されてしまう可能性があるからだ。

おれは、女性に溺れてはいけない。女性に溺れると、女性の意のままに操られるかもしれないからだ。

おれは宗教に利用されるべきではない。その宗教が力を持ちすぎると、日本を裏で操ることができるかもしれないからだ。それは、危険な状態だ。どんな人であろうとも、権力が集中すれば、腐敗するからだ。もちろん、人間には宗教を信仰する権利はある。それは、おれにもある。だけど、よくよく考えなければならないと思った。

おれは自分の特殊な能力を捨て去る機会があれば、喜んで捨てなければならない。変な力を持っているから、狙われるし、利用される。

おれが道を間違えそうになった時、叱ってくれる人が必要だ。どんな人間であろうと、失敗はするし、間違いもする。そんな時、真剣に相談に乗ってくれる人の助けがいる。

いったんミクシィはやめてしまったので、書いた記録は残っていない。だから、正確ではないけれど、簡潔に書くとこんなことを載せた。

それから、天皇家の能力を、二度と利用されてはならないと思った。どんなことがあっても、自分の能力を権力者に利用されてはならないと考えた。おれは殺されても自分の精子は売らないと心に決めた。どんなにお金を積まれても、たとえ長生きできるとしても、世界一の美人に言い寄られても、この決意は変わらないだろう。

おれには、自分の能力を利用されないように管理する責任がある。たとえ、その行為を、誰にも褒めてもらえなくても、愛する女性を作れないまま死ぬことになっても、守り抜かなくてはならない。

たくさんの賞をもらうことが、人間にとって大事なことじゃない。世の中の多くの人は、名誉や称号に弱い。名誉や称号があるだけで、

素晴らしい人間だと勝手に想像してしまう。本来、名誉や称号は、その人の自尊心を満たすものでしかない。

学者は研究成果で賞をもらう。そういう学者を除いて、他人より優れているという、優越感を得たい人ほど、たくさんの名誉や称号を欲しがる。お金があればお金で集め、権力があれば権力で集める。もちろん、お金や権力だけではもらえない賞もある。お金や権力でもらうことが悪いことだとは思わないけれど、おれはどんな名誉や称号をもらえたとしても、自分の精子は売らない。

現在のおれは、ニートで、お金もあまりない。日本では、貧乏な部類に入るだろう。名誉や称号からは、かけ離れている。だけど、おれはそれでいい。恥じることは、一つもないからだ。大事なのは、誇りだ。何があっても、屈しない意志だ。たくさんの賞を買って自分を偽っている人よりも、裸のままで信念を貫き通す自分の方が好きだからだ。他人の評価によって、自分の価値が上下するわけじゃない。他人の評価よりも、自分の信念を貫き通すべきだと思った。

だから、どんなことがあっても精子を売らないことが、おれのするべきことだと思ったし、おれには責任があると考えた。おれの一族の能力が利用されて、人々を不幸にしたというのならば、おれはその分、人々を幸福にしたい。そう本気で考えたし、それが残りの生涯かけておれのやるべきことに思えた。

ニートのおれに、その時できることは、ミクシィを通じて祈ることだけだった。だから、宗教、国籍、性別によらず、すべての人の幸福と平和を祈った。もちろん、それは今まで傷ついた人々を含めての話だ。

そのことをミクシィに書いてから、ミクシィをやめた。おれがミクシィで書いた日記を読むことで傷つく人がいたら、困ると思ったからだ。偶然かもしれないけど、ミクシィを一緒にやっている友達が、歯が折れてさし歯になっていることに気がついたからだ。大切な友人を傷つけてまで、主張すべきことは、何もないと思ったからだ。だから、ミクシィをやめた。

きみは、おれのとった行動に賛同してくれるだろうか。きみならば、もっと他によい考えがあったかもしれない。だけど、おれは誰にも相談できずに一人で考えているので、謝ることと平和を祈ることがしかできなかったんだ。それ以外に方法が思いつかなかった。おれはミクシィで発言をする機会を失い、その後も人々の咳やくしゃみは止まらなかった。

それから、しばらくしてツイッターを始めた。そのことについては、次に話そう。

十七　ツイッターをやめた理由

おれはミクシィを7月にやめた後、できるだけ友達と会うことを避けた。さびしくなかったわけじゃない。だけど、おれは自分のことだけを優先して、他人を傷つけるべきではないと考えていた。どんなに咳やくしゃみをされても、反撃はしなかった。

9月頃になって、最近ツイッターが流行っていることを知り、日々の記録になると思い、ツイッターを始めた。フォロワーは誰もいなかったが、それでもよかった。自分の記録になると思ったからだ。様々なアイデア、日常の不満など、書きこむことはいくらでもあった。

しばらくツイッターをしていると、知らない人が何人かフォローしたいと申請していることに気がついた。見ているかどうかわからないけど、フォローしたいのなら構わないと思った。直接の知り合いというわけではないし、知らない人なら、読んでもどこに住んでいるかわからないので傷つかないと思ったからだ。

ツイッターを真剣に書きこみ始めると、つながりにくい時が増えたので、邪魔されているような気分になって、逆に意地になって書きこんだ。たとえ殺されてでも、主張すべきことは主張すべきだと考えた。精神的に不安定なことも多かったので、その気持ちを素直に表現した。自分がいつ死ぬかもしれないという、恐怖心から逃れ

るためだった。
日本に台風が直撃した時には、おれの感情は今までにないくらい乱れていた。どうして、反撃しないおれの心を人々はわかってくれないのだろうと思った。人を傷つけたくない気持ちは、きっといつか伝わると考えているのに、それがなかなか伝わらないことがはがゆかった。憎しみに、気持ちが飲まれそうになった時もあった。元々、気候に感情が左右されやすい人間だった。台風が去ると、すぐに気持ちを立て直した。
感情が落ち着いてくると、おれが死んだ後の年号を考えたり、自分の父親の寿命に気がついたりした。そのことは、次の話でまとめたいと思うので、ここには書かない。
しまいに、ツイッターをしているだけでは、読んでいる人がいるのかどうかわからないと考えて、12月頃に誰もが自由に訪問できるブログを開設した。内容は、喫茶店に行って考えた。
そこで、おれは様々な個人的な意見を書いた。普段あまり意識しない日本人の宗教観や思考のバランス感覚などにも触れた。
ブログは、一カ月程でやめてしまった。見に来る人はほとんどいなかったので、これ以上やっても無駄だと思い、幸福や平和を祈ってからやめた。
ツイッターやブログでしか伝えられないことがあるように、小説でしか伝えられないこともある。そう考えて、以前から小説を書こうと思っていた。断片的な情報より、まとまったものの方が、伝わりやすいと思ったからだ。だけど、なかなか手がつかなくて、時間がかかった。
この小説の構想はかなり前からできていたし、書きだそうとすれば、すぐに完成することはできた。ただ、おれはきみに手紙を送ることが、はたしてよいことなのか、迷った。書いてあることは現実に起きたことだけど、情報はあやふやだし、根拠に乏しいものだからだ。
その結果、きみが勘違いして、暴力的な行動をすることを恐れた。

だから、すぐには、ネットの海には流さなかった。それに、大震災の時期とかぶってしまい、人々の心情を考えて、時期を遅らせた。でも、おれはきみを信じることにした。きみが最後まで読めば、きっとおれの真意が伝わるはずだ。

おれは、ツイッター―で伝えられることはすべて伝えた。ツイッター―やミクシィなどのブログで伝えたことを含めて、次の話にすべてまとめるつもりだ。きみはおれがツイッター―などで書いたことを知らないだろうから、重複にはならないだろう。ただ、ツイッター―には、余分な話や悲観的な気持ちで書いたものもあるので、それはできるだけカットして、断片的な情報もまとめることにした。

次の話でこの手紙も最後だ。おれには、きみに伝えたい気持ちが、想いが、ある。ここまで読んでくれる人は、きみ一人だけかもしれない。でも、きみさえいれば十分だ。おれは書き続けることができる。ここまで読んでくれたきみに、心から感謝する。

それでは、最後の話に移ろう。

十八　この手紙をきみに書く理由

この手紙の原型を書きだしたのは、２００９年頃だった。当時書いたものは、きみにあてた手紙ではなくて、ただの小説だった。だけど、それから数年経ち、普通の小説では、きみの心に十分響くことは不可能だろうと考え始めた。だから、きみという、架空の存在を想定して、きみに手紙を書こうと思って、前の小説をベースに書き直した。それは、一見、無謀な作業だった。すべてが、無駄に終わるかもしれなかった。構想に何年もかけたのに、完成しても誰も読まない可能性があった。だけど、今は違うことを考えている。きみは、きっと、存在する。おれはそう確信した。きみは目に見えないだけだ。

２０１１年の3月になって、やっときみへの手紙を完成することができた。今、おれは喫茶店できみへの手紙の最後の部分を書いて

いる。咳やくしゃみは、以前に比べれば、減った。だが、おれの現状はきびしいままだ。働いていないし、友達と会うこともほとんどない。

今、日本は、大震災という危機にさらされている。そのために、おれができることは少ない。おれはかなり自由を制限されているし、お金もない。もし、この小説が被災者のためになるようなら、利用してもらいたい。

きみは今、どんな気持ちだろうか。ここまで読んできて、どう感じただろうか。最初に、きみはおれに対して好意も、敵意も、もしかしたら多少の関心ですら、持っていないのかもしれないと話していたことを覚えているだろうか。その頃は、きみも、おれも、お互いの気持ちを手探りで探しているような状態だったね。

ここまで読んできて、きみの心境に変化はあっただろうか。きっと、ここまで読んでくれたきみは、おれに好意を持ってくれたか、あるいは多少なりとも関心を持ってくれたのかもしれない。そうだとしたら、それ以上に嬉しいことはない。

おれは２０１０年になって、様々なことを知った。それは、おれが自ら望んだことだ。過去や未来を知るには、勇気が必要だ。逃げたい気持ちがなかったわけじゃない。それでも、勇気を出して、知る覚悟を決めたら、いろいろなことがわかったんだ。

おれの一族の過去を知れば、悲しい歴史がある。未来を知れば、短命だとわかってしまう。でも、もう逃げる必要はない。覚悟が決まったから。逃れられない宿命だから。どんなに言い訳しても、おれが天皇家の子孫という事実には変わりはない。それは、きみがきみであることぐらい、代えがたい事実だ。

重要なのは、その事実から、目をそらさず、はっきりと直視することだ。天皇であると知った上で、どう行動し、どう生きるかだ。

ただ、ここで一つだけ言っておきたいのは、天皇家は神でも何でもなく、ただの病人ということだ。同時に、世界中で、今までおれが病人であるということを隠してくれたことに、深く感謝したい。

それでは、手紙の最後に、すべての想いをきみに伝えよう。
まず、最初にきみに話しておきたいことがある。それは寿命のことだ。おれのＤＮＡ上の父は、おそらく４６歳か４８歳頃に死んだ。そのことは、２０１０年の１０月頃にツイッター―を書きこんでいたら突然気がついた。
おれの一族は、ウェルナー症候群という病気を持っているらしい。しかも、現在のところ、延命薬は一つも見つかっていない。このままいけば、おれもそう遠くないうちに、死を迎えるだろう。
ウェルナー症候群のことを調べていたら、平均寿命が四十六歳ということがわかった。きみは、聖徳太子を知っているだろうか。日本人なら、誰もが歴史で習うから、きみも知っているだろう。
今から、１４００年以上前に存在した人物で、日本に本格的に仏教を取り入れた初めての人だ。聖徳太子は、天皇家のＤＮＡを受け継いでいたので、おれと同じ病気なはずだ。その聖徳太子が死んだのは、４９歳とのことだ。つまり、１４００年経っても、ウェルナー症候群の寿命は一向に伸びていないのだ。その事実を知った時には、さすがにショックを隠せなかった。だけど、医療は日夜進歩し、学者は一生懸命研究してくれている。だから、ウェルナー症候群の人の生活の質は、おそろしく改善した。それは確かなことだし、心から感謝している。おれには間に合わないかもしれないが、いつか延命薬ができるといいと思う。
おれはウェルナー症候群の平均寿命からみたら、もう２０年生きられない。七月の誕生日を迎えて２８歳になったら、あと１８年だ。平均寿命よりも短い可能性だってある。そうしたら、１６年ぐらいかもしれない。
おれが今すぐに解放されたとしても、相手の女性を選んでいる時間はあまりない。それでも、おれと結婚してもいいという女性がいるのなら、おれは結婚してみたいと思う。
おれはこの手紙において、様々な女性との恋愛について書いてきた。高校生の時は、栄子に告白したり、琴美と付き合ったりした。

大学生になって、早乙女を好きになった。イタリアでは、由紀と仲良くなり、トルコでは人見とデートした。
結果だけみれば、おれは彼女達に振られてしまった。それは、事実だ。だけど、もし、仮に、彼女達の中で、本当はおれと付き合ってもいいと思っているのに、おれの事情のせいで付き合えなかったのだとしたら、真剣に対応したい。
おれが今すぐ解放されて、結婚相手を選ぶのに、一年かかったとして、短く見積もると残りの寿命は１５年だ。１５年というのは、本当に短い時間だ。日本人の平均寿命から言えば、６０歳の男性と結婚するより、５年以上短い。普通なら、結婚すると、４０年か５０年は過ごせるからだ。
おれには、時間がないことがわかった。しかし、おれはこのまま、日本にいても、殺されることはないだろう。ただ、女性と付き合ったり、仕事をしたり、友達と遊ぶことは難しいだろう。
おれは、愛を育むチャンスがほしい。たとえ、１５年の結婚生活で死んでしまうとしても、愛に包まれた人生だったと、おれは感じてから死にたい。
おれがもし、普通の人と同じ寿命なら、何人もの女性を囲って生きていきたいと考えた時もある。でも、その考えは間違っていたんだ。おれは、残された時間が短いのなら、その分を一人の女性に注ごうと思ったんだ。
老化のスピードを加速するウェルナー症候群に、今のところ進行を抑える薬はないことは先ほども告げた。だから、そういった延命できないような状態にあるからこそ、おれは一日一日を大切にしていきたい。一刻も早く、愛する女性と一緒になりたい。おれが今抱えている、苦しさ、つらさ、悲しさ、苦しさ、寂しさ、そういったものが和らぐとしたら、それは、一人の女性が、一人の男性であるおれに対して、愛情を注いでくれた時だ。その女性に対し、おれが愛情を返した時だ。
生まれてきてよかったと思えるような、女性と愛を育くむ時間を、

おれは心底望んでいる。おれは死ぬ間際に、短命でも女性と出会って愛を育めたから幸せな人生だった、そう言ってから死にたい。

おれは、未来できるかもしれない妻を想う。おれは妻ができたとしても幸せにできるだろうか。おれが死んだ後に、妻に再婚してもらいたいと考えるのは、おれの思いあがりだろうか。おれが死んだ後も、妻には幸せの余韻が、いつまでも続いてもらいたい。

そして、おれは未来できるかもしれない子供ついて想う。おれに子供ができたら、幸せに過ごしてくれるだろうか。好きな人を見つけ、一緒に、最後まで添い遂げてもらいたい。

おれは、見た目は老けているし、毛深い。腹もたるんできている。かなり運動しているのにも関わらず、体型を維持できなくなっている。女性にとって、一番嫌悪感を持つタイプの人間かもしれない。

だけど、それでももし、おれと付き合ってもいいという女性が現れたら、たとえたとえ十年、二十年しか生きられないとしても、百年、二百年分の愛を注ぎたい。

おれが、死んだ後も、おれの魂は人々に伝わっていく。おれの平和を愛する心は、人々の心に宿り、いっそうの勢いを増していく。おれに子供ができたら、おれが直接子供と接する機会はなくても、おれの魂は子供へと伝わるはずだ。

おれが人々の幸福を祈ったように、おれの子供も、人々の幸福を祈るようになる。おれはそう信じている。もし、おれに子供が生まれ、天皇になる時があったとしたら、それは幸共の時代だ。その時には、おれは死んでいるだろう。おれの子供には、自分の幸せを願うとともに、世界中の人々の幸福も一緒に願うことができるような人間になってほしい。自分だけが幸せになることを考えるわけではなくて、世界中の人々の幸せを願えるようになってほしい。

おれにはあまり時間がないので、解放されたとしても、できることは限られている。でも、できる限りのことはしよう。まともに生活できるのは、あと十年ぐらいかもしれない。ウェルナー症候群は、三十代になると糖尿病を発症し、白内障になるとネットには記載さ

れている。視力は今の段階で、０．０８しかない。十年で十分の一以下に下がった。いつまで視力を補正できるかも疑問だ。失明してしまったら、まともに生活することもできなくなる。おれは日本全国を巡り、日本の良さを再発見して、それを日本の人々に、世界の人々に伝えていきたいと考えているが、実際にできるかどうかはわからない。ただ、日本は地方が活性化して幸せになり、世界の人々は日本のよさを発見して幸せになれたらいいと考えている。

おれの一族の能力が過去に戦争に利用されたと言うのならば、おれは人々を幸福にするために自分の能力を使いたい。おれは、おれだけではなく、きみと一緒に、幸せになりたいのだ。おれの幸せはきみに伝わり、きみの幸せはおれに伝わる。きみの幸せとおれの幸せは共有できる。日本という、小さな島国から、おれは幸せを発信する。多くの国の人が日本を訪ねてくれるように、おれも多くの国を訪ねたい。おれは日本と世界の国々をつなぐ、友好の懸け橋になりたい。

いつまで、体がまともに動くかわからないけど、いつかできるかもしれない、愛する女性とともに、日本を巡り、世界を巡り、友好の絆を深めていきたい。そして、きみに、こう言ってもらいたい。おれが病院のベッドで死ぬ間際に、一生懸命頑張ったね、自分の役目を果たしたね、ゆっくり休んでいいよ、そう笑顔で伝えてほしい。

おれは平均寿命から考えたら、あと二十年以内に死んでしまう。きみが何歳かわからないけど、たぶんおれの方が先に死ぬだろう。だけど、ここまで読んでくれたきみならば、おれの肉体は滅びても、きっときみの心の中におれの魂は生き続ける。きみの良心に、きみの平和を祈る心に、おれは生き続ける。

ここまで読んでくれたきみは、おれの幸せを考えてくれている人だ。他人の苦しみ、喜びがわかる人だ。きみは、暴力的な手段に頼らず、平和的にものごとを解決できる人だ。おれは、きみに手紙を書けてよかった。今は心底そう思う。書くべきかどうか、本当は迷ったんだ。一人よがりではないか、おれがいくら平和を訴えても間

違った解釈をする人がいるのではないか、そう考えて何度も消そうとしたんだ。
だけど、迷った末に、おれは手紙を書き終え、ネットという広大な海に、手紙を託すことにした。それは、きみが平和を祈る心の持ち主だと信じているからだ。おれの平和を祈る気持ちは、きっと変な誤解をせずに、きみに伝わると思ったからだ。きみの、良心を信じたからだ。
おれはこの手紙で、特定の国や団体を批判したりしなかった。あくまで推測にすぎないし、たとえおれの推測があっていたとしても、批判すべきではないと思った。それは、おれはどんな国とも、どんな団体とも、仲良くしたいと考えているからだ。きみとこの手紙を通して、かけがえのない友情をはぐくんだように、世界の人々とも友好を深めたいと思っているからだ。
そして、もし国民の同意を得られるなら、宗教によらない、平和を祈る施設を皇居に作りたいと思う。
おれは、たとえ自分を傷つけた人でも、攻撃すべきではないと思っている。人は攻撃されると、攻撃を返す。憎しみの連鎖につながる。おれがやりたいことは、そうじゃないんだ。憎しみの連鎖を生みたいのではなくて、人が人を思いやる、善なる連鎖を、このきみへの手紙で作りたいのだ。
おれは今、この手紙を完成させようとしている。その数日前に、おれはアダルトビデオの真相に気がついた。アダルトビデオは、おれのために作られたのだと思った。おれの、たぐいまれな性欲を処理するために、仮想上の彼女として、アダルトビデオは作られたのだ。彼女達は、多くの人の前で、裸や性交を見せた。それは、苦痛を伴う行為だったかもしれない。つらかったのかもしれない。だけど、そういった行為によって、彼女達の美しさや価値が下がることはない。もし、彼女達の価値が下がることがあるとすれば、そういった女性が、自分がアダルトビデオに出演することによって、価値が下がったと自分を卑下した時だけだ。それ以外に、彼女達の価値

が下がることはない。
　おれは彼女達に、本当に感謝している。もし、アダルトビデオが海外のものしかなかったら、確かにおれは海外の女性に興味を抱くようになってしまったかもしれないからだ。だから、様々なアダルトビデオを作り、日本人の女性に興味を持つように仕向けた。おれは、彼女達が、幸せな日々を送ってくれることを、心底祈っている。本当に、おれにできることはそれだけだ。
　おれは残された時間を、小説を書くことにすべて注ぎこめば、それなりの小説が書けるようになるかもしれない。可能性としては、十分あり得ることだ。だけど、それがなんだと言うのだ。名誉よりお金より何よりも、おれは愛が欲しい。愛する女性が欲しい。ただ、だからといって、そのために、自分の体や精子を売ることはできない。たとえ、一生女性を愛することなく死ぬことになったとしてもだ。
　心の底から、おれは女性を愛する機会がほしいと思っている。だけど、今後もこういう状態が続くのなら、おれは女性を愛することを諦めた方がいいのかもしれない。残された時間があまりに短くて、愛情を注ぐ時間が足りないかもしれないからだ。そういった女性の幸せを本当に考えるなら、おれは身を引くべきかもしれない。
　おれは自分の運命を自分で変えることはできない。でも、きみはこの手紙を通じて、おれの過去と現在を知っている。おれはこの手紙を通じて、おれの過去と現在の価値や意義を変えようとした。もしきみがこの手紙が価値あるものだと感じたのなら、それだけでおれやきみの運命が変化した可能性がある。
　きみの慈愛満ちた心が、きみの隣人へと広がり、きみの街へと広がり、きっとおれのところまで、届くことだろう。きみが人を思いやる心を忘れない限り、おれは現状に耐えて、必死で生き続けることだろう。なぜなら、きみの中には、すでに一生消えることのない、平和を愛する心が、物事に感謝する精神が、人を思いやる魂が、熱く燃えたぎっているからだ。それはいかなる人が消そうとしても、

消せるものではない。
おれは、旅行に招いてくれた韓国に対して、非常に感謝している。だけど、国の方針に背いて公式に謝ることはできない。おれが独断で決める権利はないのだ。ただし、それは、天皇としての立場においてだ。おれ個人の、個人的な意見とは違う。天皇に責任があったかどうか、それはおれが決めることじゃない。誰が決めるかというのは、難しい。たとえ、学者が歴史的資料に基づいて検証した結果、おれの祖先が無罪だと判断したとしても、感情的に受け入れられない人は多いだろう。
過去の天皇が、戦争に対して、否定的な考え方を持っていたというのは、聞いたことがある。だけど、後で資料を改ざんしたのではないか、国民の前では戦争に肯定的に話したではないか、そういう風に言えば、いくらでも責任は追及できる。言葉一つとっても、解釈は多様だ。悪くとらえようとすれば、いくらでも悪くできるし、よくとらえようとすれば、いくらでもよくとらえられる。
天皇の立場としては、謝れないのかもしれない。国の王なのだから、日本政府の意向に反したことは話すことはできない。
だけど、この場を借りて、もう一度おれがきみを通じて謝るのは、天皇家の子孫として、一人の日本人として、一人の人間として、国外・国内に関わらず、多くの人を傷つけるという結果になってしまったことを謝っているのだ。おれの先祖が謝る機会がなかったというのなら、この場で謝ろうと思うのだ。結果として、戦争を避けられず、多くの人を傷つけてしまったことを謝りたいのだ。
その当時、もう少し、国をよい方向にもっていく知恵はなかったのか。しかし、天皇の行動は制限されていただろうし、難しかったのかもしれない。ネットの存在もなかったし、自由に発言することもできなかったのかもしれない。おれがその当時の天皇だったとしても、戦争へと向かっていく日本全体の流れを止められなかったのかもしれない。それは、わからないことだ。議論しても、結論の出ないことだ。過去をこうだったらいいのにと悲観して、ありもしな

いことを仮定することよりも、未来にできることを考えるべきだ。過去に失われた命を生き返らせることはできないが、未来に奪われるかもしれない人々の命は救えるかもしれないからだ。過去を忘れるのではなく、そういう過去があったからこそ、未来へ続く道の中で平和に貢献したいのだ。天皇は、平和の象徴なのだと、いつか世界中の人々に感じてもらいたいのだ。おれの一族の能力を悪用されたのなら、よりいっそうおれは平和に貢献したいのだ。

平和に貢献するためのアイデアは持っているが、おれには何しろ残された時間が少ない。どこまで実行できるかわからない。

それでも、おれは人々の幸福や平和に貢献したい。それが、天皇の子孫として生まれた宿命だからだ。本当は、おれは権力になんて興味はないんだ。天皇に、国の王に、なりたいわけじゃない。元々、天皇はただの象徴で権力はないし、権利も一部失っている。天皇という名を継げば、過去のことを責め続けられるだろう。それならば、一般人として生きた方が、幸せなのではないかと考えた時もある。

だけど、逃げるわけにもいかないんだ。人には、人の、運命がある。おれにしかできない、人々への貢献の仕方がある。天皇としての立場でなければ、できないこともある。おれは個人としての幸福を追求するとともに、人々の幸福も追求する必要がある。

それが、幸共という考えだ。自分だけが幸せになるのではなく、共に幸せになろうという、思想だ。日本の年号は今まで誰が考えていたのかわからないが、もし天皇が考えていたというのなら、おれが死んだ後の日本の年号は、幸共だ。おれは未来の子供たちの幸せのために、準備をする必要がある。幸せというものは、伝わるものだ。

人々という森の中に流れる川を通じて、幸共という考えは広がって行く。それは武力に訴えるものではなく、互いに尊重し、互いの幸せを考えるものだ。

人を個人としてとらえ、一個の存在だと考えることは重要だ。二十一世紀は、個性が大事にされる時代だ。だけど、その一方で、地

球を一つの生命ととらえることもできる。地球を一個の生命ととらえたら、おれもきみも、同じ一つの生命なんだ。きみは地球の皮膚かもしれないし、臓器かもしれない。きみやおれは、地球の一部であり、きみとおれは地球という生命を通じてつながっている。きみの幸せはおれの幸せであり、おれの幸せはきみの幸せでもある。

幸共という考えは、言いかえれば、地球の幸せを考えることなんだ。地球が幸せになれば、きみも、おれも、幸せになれる。地球を愛する心が、人々を思いやる心が、他人を尊重できる心が、きみとおれの中に流れる、見えない川を通じてつながっていく。

きみの心の中に、善なる炎がともっている限り、おれは一人じゃない。触れることはできなくても、感じることができるからだ。

きみの存在が、おれの支えになっていく。きみに対するおれの愛情がきみに伝わっているように、きみの愛情がおれに伝わっていく。おれはこの手紙を通じて、きみに出会えてよかった。本当に、よかった。きみと魂のキャッチボールを交わすことで、おれは精神的に強く、やさしくなれた。きみの存在が、おれに勇気をくれた。きみがいてくれたおかげで、きみへの手紙を最後まで書くことができた。

きみは優れた人間だ。尊敬に値する人だ。きみの、人を思いやる心が、おれの心を癒やしていく。おれの心は、きみの心に包まれていく。

おれはこの手紙を書くことで、きみのことをだんだんと好きになっていった。愛するようになった。きみの中には、愛が溢れている。その想いは、見ることはできなくても、おれに十分に伝わっている。

おれはきみの幸せを祈っている。きみがおれの幸せを祈ってくれているのと同じことだ。きみとおれの中には、見えないけれど、明確な絆ができた。この絆は、きみの周囲へと広がって行く。ネットの海のように、伝わっていく。心と心が、つながっていく。

人間のことを善という考えもあるし、悪という考えもある。おれは中庸だと思っている。人間は、善にも悪にもなる。ということは、

どんな人間でも善になる可能性があるし、悪になる可能性もある。
誰かが、戦争をすべきだと主張すると、その考えが広がっていくことがある。それは、大きな流れになり、うねりになり、誰にも止められないものへと変貌していく。人間には、そういう性質がある。元々、妄想をしやすい脳の構造なのだ。周りの意見に流されて、善悪を判断することができなくなることがある。
だけど、おれは逆のこともありうるのではないかと考える。おれがこの手紙を通じて、きみと、きみを取り巻くすべてのものの幸福と平和を祈ったのなら、その考えが、大きな流れになり、うねりになり、誰にも止められないものへと変貌するのではないか。地球という一個の生命体が、愛情深い考えを持つ存在へと変わっていくのではないか。そう考えて、きみへの手紙を書くことにしたんだ。それが、きみへの手紙を書くことにした、本当の理由だ。
人は、聖人君子にはなれない。少なくとも、おれはそうだ。好き嫌いはあるし、多くの女性とセックスしたい。本音を言えば、どこの国の人だろうと、おれは美しい女性が好きなのだ。おれは日本国籍を持つ人と結婚しないと国際問題になるだろう。それはわかっている。だからといって、美しい女性は国に限らず、美しいと考えていることは確かだ。
好きな女性に対する、独占欲も強いかもしれない。好きな女性が他の男性と話しているだけで、嫉妬してしまうかもしれない。
おれの能力は特殊なので、嘘をつくとすぐにばれてしまうが、それでも嘘をつくことがある。もちろん、この手紙では、できるだけ本音で話しているつもりだ。そうでなければ、到底きみの心には響かないと考えているからだ。
そんなおれでも、確実に持っているものがある。それは、愛だ。愛は、人間に共通のものだ。言葉も、文化も、支持する宗教も、国も、性別も、国境も、年齢も超えて、伝わるものがあるとしたら、それは愛だからだ。
おれは、きみに、愛を伝えたかったんだ。同時に、きみにも周り

の人々に愛を伝えて欲しかったんだ。互いの幸せを、平和を、一緒に祈って欲しかったんだ。

おれが生まれたことに意味があるというなら、きみにこの手紙を書くために生まれてきたのかもしれない。今は、そんな風に思える。拙くても、下手でも、誠実に、真摯に、伝えようと思えば、きっときみの心に届く。きみの心に響く。

おれは、きみのことが大好きだ。他に、表現のしようがない程、きみのことを愛している。おれの心の中は、きみへの愛情で溢れており、おれの心の周りは、きみからの愛情で溢れている。

愛が、幸福や平和を祈る心が、地球という生命体の心臓が鼓動するように、世界中に溢れている。生命の、素晴らしさが伝わってくる。

きみやおれの心臓が鼓動しているように、愛という血液を送る地球の心臓が、一生懸命に鼓動している。おれは、その流れの中に、そっと、この手紙を流すだけだ。元々、水路はあったものなんだ。ただ、きみもおれも、気づかなかったり、忘れていたりしただけなんだ。

おれは、この手紙を書く中で、気がついたんだ。きみとおれの心はつながっている。きみときみを取り巻く人々の心ともつながっている。

おれはここまで書いていて、この手紙の続編を書く必要がないことに気がついた。これ以上のものは、どんなに頑張っても、書けそうにない。普通に考えれば、この手紙はおれ一人で書いたと思うかもしれない。だけど、違うんだ。この手紙は、この小説は、きみと一緒に作った、共作なんだ。なぜならば、この手紙は、きみのことを想いながら書いたからなんだ。

この手紙は、きみに送る、最初で最後の手紙になるだろう。後は、運命の流れの中に身を任せるだけだ。おれができることは、すべてやった。

もう、この手紙というバトンは、きみの中にある。バトンをどう

するかは、きみが決めることだ。おれが決めることじゃない。言葉足らずかもしれないが、伝えるべき重要な芯は伝えられたと思う。

今、きみの心の中は、どうなっているだろうか。愛に溢れているだろうか。きっと噴水のように、溢れていることだろう。少なくとも、きみの心の周りは、おれのきみに対する愛情で溢れている。

もう、言葉は十分だろう。言葉で伝えられるレベルのものは、できるだけ伝えた。きみとおれは、言葉を超えた、心と心でつながっている。これ以上の言葉は陳腐に思えるかもしれないが、最後に、きみにもう一度だけ伝えて終わりたい。最後まで読んでくれたきみの愛情に感謝する。きみと、きみを取り巻くすべてのものに、幸福と平和を想って、祈る。

—　1　—

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0230s/

親愛なるきみに捧げる一通の手紙（後半）

2011年3月29日14時10分発行